



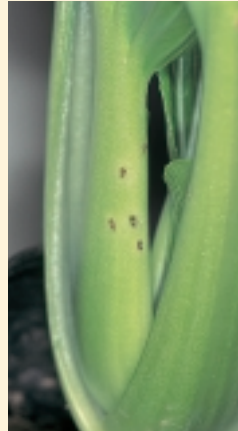
チンゲンサイを食害中の1齢幼虫。葉表の表皮を残して食害する。



成熟幼虫の体表は濃い茶褐色。



土中で虫室を作って蛹化する。



産卵痕が茶褐色斑として残り、商品性が低下したチンゲンサイ。



成虫および幼虫の食害により、生育が停止したハクサイ。

ひとくちメモ

1卵はOK、2卵は格落ち

ダイコンサルハムシの産卵行動は特異的で、中肋や葉柄に傷をつけて卵を産み、糞で覆って隠します。天敵の目をくらますにはまことに効果的な方法で、感心させられますが、この産卵傷はいつまでも残ってしまいます。

実は、チンゲンサイやコマツナなどの葉物にこの産卵痕があった場合、不快感を与えるということで商品価値が下がってしまうことがあります。1株につき傷が1個ならOK、2～数个は2等品以下、多数あれば商品性なし。これが流通の実態で外観を重視した評価です。

農業の使用が厳しく制限されていますが、ゲリラ的に発生する害虫には登録農薬は非常に少ないのが現実です。農家に負担をかけるだけでなく、消費者や流通関係者も考え直す必要があるのではないのでしょうか。

害する。

1～2齢幼虫の食害痕は、葉裏から葉表の表皮を残して食害するコナガと近似する。

3齢幼虫以降は穴をあけるように食害する。中肋や太い葉脈を残してほぼ円形に食害することが多いので、多発生すると網目状の被害葉となる。成虫も幼虫と同様に葉を食害するが、時には葉表からも食害する。

葉のやわらかいアブラナ科野菜はすべて食害するが、キャベツやブロッコリなど葉のこたい種類は食害しない。産卵痕が残るので、チンゲンサイ、コマツナ、タカナなどでは商品性が低下することがある。

防除のしかた

アブラナ科野菜 農薬の登録はないので、使用しない。

慣行防除を行って行けば発生しないが、減農薬や無防除栽培の場合は発生することがあるので、圃場外の発生源であるアブラナ科の雑草(スカシタゴボウ、ナズナ、タネツケバナなど)を除草する。

また、発芽後や苗定植後に発生すると被害が大きくなるので、早期に寒冷紗などの防虫網で覆って、成虫の飛来を防ぐようにする。



成熟幼虫。



幼虫や成虫は集合していることが多い。



エダマメ子実の被害。吸汁により汚斑が生じたり変形したりする。

ひとくちメモ

衛生害虫のマルカメムシ

マルカメムシは、野外では主にクズに発生しています。クズの新芽は一面に毛で覆われていますが、こうした植物が好物のようです。したがって、クズが繁っている所では時に大発生することがあります。

成虫は10月以降はクズから離れて、主に明るいう草の枯れた草株で越冬しますが、越冬地に向かう前、直射日光が当たっている日だまりに多数集合する性質があります。これが、山沿いや河川沿いの日当たりのよい家庭だったりすると、その悪臭ゆえに招かれざる客となってしまいます。洗濯物に侵入された場合はなおさら悲劇です。対策はクズの除草に努めるしかありません。

成熟幼虫であり、幼虫はほとんど葉や茎から吸汁する。インゲンマメなどのマメ類にも寄生するが、毛じが少ないので発生数はさほどでもない。また、成虫も葉の方を吸汁することが多く、莢は吸汁しないので被害は発生しない。芽、葉の被害は現れない。子

実は吸汁されるので、変形、汚斑、萎縮などの被害となることがある。被害症状はほかのカメムシ類と共通しており、マルカメムシ特有の症状はない。

防除のしかた

野外の発生源であるマメ科植

物の除草を徹底させる。特に、クズへの寄生が多いので、繁殖地に近い圃場では栽培を避けるようにする。

エダマメ 開花後の莢伸長期に、次の薬剤のいずれかを散布する。スミチオン乳剤1,000倍(21日-4回)、トレボン乳剤1,000倍(21日-2回)。

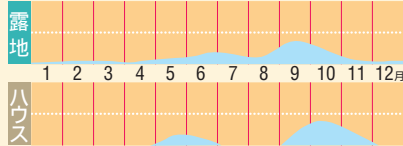


# ダイコンサルハムシ



交尾中の成虫。

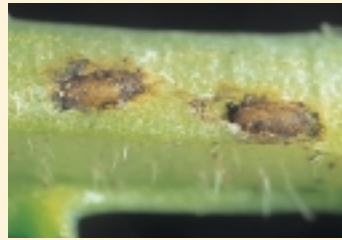
発生消長（成虫、幼虫）



## 形態および生態

成虫は雌雄とも全体が藍色で、光沢がある。幼虫の体表は孵化直後は黄色だが、間もなく黒褐色となり、成熟幼虫にな

るほど濃くなる。体毛は1歳幼虫から黒褐色。成虫は主に葉柄や太い葉脈に、また、一部は葉の表面を口で薄く削って、卵を1粒ずつ産卵する。



葉柄に産卵された卵（ダイコン）。



孵化直後の幼虫。体表は黄色、体毛は黒色。

葉に産卵された卵（ダイコン）。

卵は細長く、黄色をしているが、成虫は産みつけた卵を糞で覆うため黒褐色に見える。孵化幼虫は卵殻を食べない。成虫、幼虫とも葉を食害する。幼虫は葉裏のみを食害するが、成虫は葉表からも食害することがある。成熟幼虫は土中に潜り、虫室を作って蛹化する。成虫で、枯れ草下などにおいて越冬する。4～11月に数世代発生し、この間は連続して成虫および幼

虫を見ることができる。例年、平地では9～11月、山間地では7～8月に幼虫の発生が多い。生態については不明な点が多いが、越冬成虫は7月ごろまで生息し、数百の卵を産むこともあるという。広くアブラナ科野菜全般を食害する。

## 被害のようす

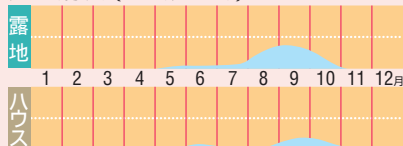
1歳幼虫は卵殻を食べずに直ちに分散を始め、葉裏から食

# マルカメムシ



成虫

発生消長（成虫、幼虫）



## 形態および生態

成虫は雌雄とも黄褐色で黄色の小点があり、光沢を持つ。

幼虫の体表には長毛がある。葉、茎、莢などの毛じに産卵する。成虫と幼虫の両方がマメ科植



若齢幼虫。幼虫期は体毛が長い。

物に寄生し、葉、茎、子実から吸汁する。成虫、幼虫とも集合していることが多い。成虫で枯れ草下や樹皮下、屋内などにおいて越冬する。成虫は4～11月まで見られる。例年、8～10月に幼虫の発生が多い。

広くマメ科野菜を吸汁食害する。

## 被害のようす

毛じの発達したマメ科植物の新芽、葉、茎、莢などに寄生する。このため、作物ではエダマメに発生することが多い。莢を吸汁加害するのは成虫と





土中で蛹化する。



定植直後に株元を切断されて枯れた、レタスの株と幼虫。



定植直後に株元をかじられ、生育が停止したキャベツ。



生育初期に株元をかじられて枯れたニンジン。

ある。

秋にはハスモンヨトウやヨトウガも発生する。両種とも株元を切断することはないが、成熟幼虫の葉の食害痕は似ているので注意する。

### 防除のしかた

本種は雑草地では普遍的に発生しているので、作物の播種や定植の2週間前までに農地を耕うんして、雑草に発生している幼虫を絶やしておく。農地の隣接地に雑草が繁茂しているときは、そこから侵入してくるので、境に溝を掘るか障害物（波板など）を設置しておく。被害が出たら株まわりの土を掘り、幼虫

を見つけて捕殺する。

**キャベツ** 播種または苗の定植直前に、カルホス微粒剤F10a当たり6kg（定植時 - 2回）を土壌表面に散粒するか、土壌混和处理する。育苗中や定植後に被害が出たら、次のいずれかを株元に施用する。ダイアジノン粒剤10a当たり4～6kg（30日 - 2回）、ネキリトン10a当たり2～3kg（14日 - 6回）、デナボン5%ベイト10a当たり3～6kg（14日 - 3回）。

**ダイコン** 播種時にカルホス微粒剤F10a当たり6kg（播種時 - 2回）を土壌混和处理する。生育中に被害が出たら、次のいずれかを株元に施用する。ネキリ

トン10a当たり3kg（14日 - 6回）、デナボン5%ベイト10a当たり3～6kg（7日 - 6回）。抜き菜の場合は、ネキリトン粒剤やデナボン5%ベイトを使用する。**レタス** 定植前にカルホス微粒剤F10a当たり6kg（播種時または定植時 - 2回）を土壌混和处理する。生育中に被害が出たら、ラーピンベイト10a当たり3～4kg（45日 - 2回）を株元に散粒する。

**ニンジン** 播種時にダイアジノン粒剤5を10a当たり6kg（播種時 - 1回）土壌混和处理する。生育中に被害が出たら、ネキリトン10a当たり1～3kg（21日 - 2回）を株元に施用する。

### ひとくちメモ

#### 期待の1頭をゲット

連載の開始にあたり、タマナヤガ探しの抱負を述べるとともに、皆様からの情報提供をお願いしました。

この数年、わずかな情報を元に県内をくまなく探し歩き、北は北海道から南は九州まで1道15県を訪ねましたが、すべてが空振り。結果的にはタマナヤガを口実に、各地を観光旅行したようなものでした。タマナヤガは、20年ほど前まではどこにでも発生していただけに、近年の減少は摩訶不思議です。

しかし、平成15年9月に久保田栄氏から貴重な幼虫を頂き、20年ぶりの再会が実現しました。ようやく1頭を羽化させて記念撮影したのが、今回掲載した写真です。結婚式の記念写真1枚に至る経費はかなり高くなりますが、この成虫写真にもそれに匹敵する経費がかかっているかもしれません。



食害部付近で白い繭を作って蛹化する。



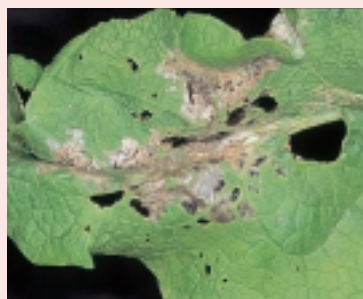
幼虫は葉を巻いたりつづったりして食害し、食害部は透け葉状となる。

時に多発生して生育に影響を与える。

### 防除のしかた

農薬の登録はないので、使用しない。

発芽後から生育初期に発生した場合は、被害が大きくなるので、栽培初期には寒冷紗などの防虫網で覆い、成虫の飛来を防止する。



食害部は、展葉すると穴あきの被害となる。



### ひとくちメモ

#### 限定された産卵場所

ゴボウハマキモドキは、ゴボウの新芽や、やわらかな葉の裏側のみ産卵します。ゴボウの葉裏には白い毛じが薄く一面に生えて白く見えますが、観察してみると、成虫はこの毛じにからみつけるようにして産卵しています。展開した葉では毛じがなくなっているため、卵を産みつけることはありません。

それならば、毛じに似たものであれば産卵するだろうと、あれこれと資材を使って試しているのですが、一向にだまされくれません。ゴボウハマキモドキは神経質のようで難敵ですが、採卵のために今後もだます努力を続けてみるつもりです。

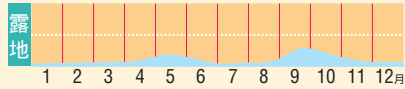


# タマナヤガ



成虫。前翅にはじん臓型の斑紋がある。

発生消長（幼虫）



## 形態および生態

成虫は黒褐色の翅の中部に、じん臓型の斑紋がある。非常に広食性であるが、成虫が産卵する植物は限定されている。イネ科の雑草に1粒ず

つ産卵する。若齢幼虫はイネ科雑草を食害し、成熟するにつれて広葉の雑草も食害する。年2～3回発生し、5～6月、9～10月に被害が多い。越冬態は蛹や成熟幼虫である。



成熟幼虫。体色は灰色から黒褐色と変異がある。皮膚は光沢がなく皺肌状である。



成熟幼虫のアップ

カブラヤガの成熟幼虫。タマナヤガと酷似するが、皮膚は光沢がある。



夜行性なので、中齢幼虫以降になると、昼は土中に潜る習性がある。

## 被害のようす

作物に直接産卵することはないので、若齢幼虫による被害は発生しない。多くの場合、雑草が生えている農地を耕うんした後に、作物を定植したり播種したりすると、生き残っていた幼虫が植えられた作物を突然食害するようになる。雑草地に隣接した圃場では、苗の定植やタネの発芽後に、中齢以降の幼虫が侵入して食

害する。中齢幼虫までは葉を食害するが、成熟幼虫は大あごが発達し、かたいものを好む習性があるので、株元をかじったり切断したりする。このためネキリムシと呼ばれる。根元を切断された株は急に枯れるが、かじられた株は生育不良を起こすか、後日に枯れることもある。

## その他

カブラヤガは、本種と生態および被害の特徴が一致する。近年発生しているネキリムシは、ほとんどがカブラヤガで

# ゴボウハマキモドキ



成虫。

発生消長（幼虫）



## 形態および生態

成虫の前翅は茶褐色で、灰色の帯状紋と黒い小黑点がある。ゴボウの新葉の葉裏に、毛じ

からめて1粒ずつ産卵する。孵化直後から若齢幼虫の体色は、白から淡黄色。中齢以降の幼虫は淡緑色となる。幼虫は糸を吐いて葉を巻いたり、



葉裏の毛じに絡ませて産卵する。卵色は淡黄色。

若齢から中齢幼虫の体色は白から乳白色だが、成熟幼虫は淡緑色。



重ねて食害したりする。蛹は食害部付近で、白い繭を作って蛹化する。4～11月まで連続して発生が見られるが、9～11月の発生が多い。越冬は蛹で行われる。ゴボウでは春から秋まで連続して数世代発生するが、ほかのキク科野菜では発生しない。花類ではキクに発生する。

## 被害のようす

1齢幼虫から糸を吐きながら葉を食害する。中齢幼虫以降は大量の糸で葉を巻いたり、つづったりして食害する。表皮を残して食害するので、初期には食害痕は透け葉状となるが、展葉するに従って穴あきとなる。